

翻訳と解説

ドイツにおける排外主義的運動「ペギーダ」の生成

河村 克俊

西暦 2015 年は、西アジアや北アフリカから大量の難民がヨーロッパへ雪崩れ込んだ年として人々の記憶に残ることになるだろう。週刊『シュテルン 35 号』によれば、この年ドイツで難民申請を行った人の数は、およそ 80 万人にまで上った¹。そして、このような難民流入の兆しは、既にその前年にあったようである。2014 年秋、旧東ドイツに位置するザクセン州の州都ドレスデンで、排外主義を標榜する市民グループが活動を始めた。最初は十二名の小さなグループとして設立されたが、その数か月後には 25,000 人に上るデモを組織するに至る。このグループ、「ヨーロッパのイスラム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」(ペギーダ)は、どのような経緯で生まれたのだろうか。この点について理解するため、ドレスデン工科大学のハンス・フォアレンダー教授を中心とする研究チームの著書『ペギーダ』²をみることにしたい。以下は、その第二章「発展」本文の翻訳である³。

発展 生成

「ヨーロッパのイスラム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」(ペギーダ)の運動は、2014 年 10 月 11 日開設の入場制限のかかったフェイスブックのグ

ループから誕生した。後にペギーダの組織チームとなる中心メンバーはこのフェイスブックで既に、公共の目に映る自分たちのイメージや活動の端緒について計画し議論していた。そして様々な名称の候補について — 「平和を愛する」ヨーロッパ人から「民族的」ヨーロッパ人等の中で — 熟議し、自分たちが公の場に現れるときのイメージについて論議していた。最終的に選ばれた名称「愛国的ヨーロッパ人」によって、平均的な市民から生まれた運動であるというイメージが形成される。フェイスブックの構成員はすべてドレスデンないしその近郊の町の出身者だった。設立の動機として、発起人であり調理師の免許をもち、広告代理店を自由業で営むルッツ・パッハマンは、後に以下のように述べている。自分とその同志はドレスデンで PKK (Partiya Karkeren Kurdistan) の支援者によるデモをみて、またセレとハンプルクで民族的・宗教的な動機による二つの争いを目の当たりにして、街路での抗議活動を呼びかけるというアイデアに思い至った、と。事実、これらの事件はただ従来のメディアによるだけでなく、さらにソーシャル・メディアを通じて広範な政治的議論を引き起こした。その理由は先ず、シリアとイラクでのいわゆるイスラミック・ステートの活動や彼らがビデオを用いて演出す

1 Stern Nr 35, 25.08.2016, S. 38.

2 Hans Vorländer, Maik Herold, Steven Schäller, PEGIDA. Entwicklung, Zusammensetzung und Deutung einer Empörungsbewegung, Springer Fachmedien Wiesbaden 2016.

3 Ibid. [Kapitel] 2. “Entwicklung”, S. 5-16. なお、註、図版等は割愛している。

る意図的殺人の強力な効果である。これらの事件が誘因となり、クルド人のグループであるペシュメルガ-ミリツェンに対してドイツでどのような支援が可能であるのか、ということが議論されることになる。そしてドレスデンでは2014年10月10日にデモが起こり、参加者たちは、ドイツでは禁止されているPKKへ武器を供与することを求めた。このデモをルッツ・バッハマンはフィルムに撮り、ソーシャルメディアを通じて拡散した。

もう一つの理由となったのは難民宿舎の問題であり、これが2014年秋のペギーダ成立を推し進める直接の動機となる。その際ドレスデン市の行政機関ならびにその周辺の行政区により、難民申請者への新たな宿泊施設の設置に関する計画が公表されたことが、決定的な誘引となった（バウマン-ハルトヴィック他2014.11.26）。ドレスデン市は既に2014年6月に、増え続ける難民申請者に対応し、750万ユーロの追加予算措置を新たな難民申請者の宿泊施設のために計上する（ヴェックブロート2014.6.27）。同時にいわゆる「ドレスデンの難民」という円卓会議が設立され、教会や慈善団体の代表が、また様々な協会や政治的活動家の代表が顧問としてそこに加わった（シェードリッヒ2014.9.7）。そして2014年10月24日に公的計画が提示された。難民申請者のための2,150のベッドが、12の宿泊所と220の賃借住宅に配分される。地方新聞は審議ならびにその結論について詳細に報告している。

またザクセン州全域と同様ドレスデン近郊のその他の市町村でも流入する難民が増加するという予測から、難民ならびに難民申請者のための新たな宿泊施設の必要性が明らかになった。その際、当該市町村ではなにかんずく難民申請者を一部の施設に集中的に押し込んでいる、という批判にいかに対応すべきかが懸念された。そしてドレスデン北西、マイセン近郊の小さな町ベルバが公的な議論の焦点となる。というのもここではこの地方のもつ若干の特殊性により、難民申請者を集中的に収容する施設のもつ問題が、他の町より以上に明確に現われたからだった。ベルバは後にまた、ペギーダにも誤った

難民受容政策の典型的な事例として取り上げられることになる。

これらの出来事はフェイスブックを通じて結びつく人々に、出かけよう、というメッセージを与えることになった。「ヨーロッパのイスラム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」という名称に込められた「自分たちが」脅威にさらされているというシナリオは、数千に上る人々が動揺しつつも迅速にデモに参加するに際して、心の均衡を保つのに役立ったようだ。

動員

ペギーダの世話人がフェイスブック上で友人や知人の間で配信したドレスデン中心部で行うデモへの最初の公の呼びかけに対して、2014年10月20日のデモに300から350人が集まった。翌週からは参加者の数が急速に増え、またドレスデン以外にも多くのペギーダの支部が現われた。そして2014年11月半ばには、ヴュルツブルグのグループがペギーダの名前を使ってデモを行っている。さらに12月にはカッセル、ボン、ミュンヘン、デュッセルドルフ、また年が明けてキール、ザールブリュッケン、ブラウンシュヴァイクならびにその他の都市でもデモが行われた。ドイツ国内の支部では、活動の方向性が一致し、また一部にはペギーダの名称を用いる国際的なグループも生まれている。それは例えばオーストラリア、イギリス、スペイン、オーストリア、ポーランド、オランダでのことである。

ペギーダが最も成功するのはドレスデンである。ドイツの他の都市ではしばしばデモの呼びかけにほんの数百人しか集まらず、対するカウンターのがペギーダ支持者数を上回るのに対して、ドレスデンでは状況がちょうど逆になる。「愛国的ヨーロッパ人」はここで1月中旬までに急速な成長を遂げ、2015年1月12日にはついに約25,000人のデモ参加者を数えることで、ピークに達した（図2.1:略）。続く月曜日にはペギーダと関わりのあるすべての催しがドレスデンでは突然に取り消しとなった。それは治安当局が「はっきりとした威嚇」を、ペギー

ダの組織チーム構成員に対する襲撃計画のあることを確認したからである。2015年1月25日の日曜日、約17,500人の参加者が集まり、数週前にみられた最高値に次ぐ数値を記録している。内部抗争ならびにペギーダ組織世話人の分裂を経たあと、2015年2月からは月曜日ごとに催されているデモへの参加者ははっきりと減少している。オランダの右翼系大衆扇動政治家ゲルト・ヴィルダースの講演があった2015年4月13日の催しを例外として、デモ参加者数は2015年7月末まで2,000から3,000人くらいに止まった。ドイツの他の都市にあるペギーダの多くの支部では、デモや集会への参加者数はドレスデンに比べかなり少なく、しばしば数百人程度に止まっている。地方の組織ではしばしば最初の催しが期待を裏切る結果となり、また組織内部でのいさかいのため、デモがまったくできないという事態が起こっていた（コレンベルグ2015.5.6；クロリ2015.3.16）。最も成功したペギーダの支部としてザクセン州の二つの組織、ライプツィヒのレギーダとケムニッツ/エルツゲビルゲのペギーダがあげられる。けれどもこの「両市での」成功は、ドレスデンと比べるとかなり小規模だった。ライプツィヒは2015年春には常に約500から1000人のデモ参加者があったに止まり、ケムニッツ/エルツゲビルゲでは概ね300から500人程度で、2015年夏にはどちらも動員数は下がる傾向にある。

組織

ペギーダは2014年10月、12名によって創設され、この12名体制での「組織チーム」で2015年1月末まで運営され、この委員会での多数決によって全ての決定が行われた。たとえば月曜ごとのデモの進路についての方針や、メディアや政治団体との関わりに至るあらゆることがそこで決められた。

12名のペギーダ創設メンバーの職業や年齢についてはただ断片的にのみ知られている。2014年秋に行われた最初のデモ当時、彼らは — ルッツ・バッハマンの比較的若い夫人であるヴィッキー・バッハマンを含め — すべて37歳から55歳ま

での間であった。少なくとも彼らのうちの9名は、零細な自営業者であり、主にサービス業を営んでいた（ルッツならびにヴィッキー・バッハマン、ステファン・パウマン、ジークフリート・デブリッツ、トーマス・タラッカー、ベルント・フォルカー・リンケ、フランク・インゴ・フリーデマン、アヒム・エクスナー、トム・パラス、ルネ・ヤーン）。彼らはそのとき、営業上の報復を受けねばならなかった（フリーデマン、エクスナー、L. バッハマン）。創設メンバーのうち女性は二名である（V. バッハマンとカトリン・エルテル）。三名はペギーダ創設に先立ち既に政治組織のもとで活動していた（エクスナーはAfD [Alternative für Deutschland ドイツのための選択肢] で、タラッカーはCDU [Christlich-Demokratische Union キリスト教民主同盟] で活動しており、デブリッツは2009年マイセン市参事選挙にFDP [Freie Demokratische Partei 自由民主党] から立候補していた）。一部の人はドレスデンの興行関係者と職業柄結びつきがあった（エクスナー、パウマン）。別の人々はサッカーの支援者団体と（S Gディナモ・ドレスデン）、またアイスホッケーの支援者団体と結びつきがあった（エクスナー、トーマス・ヒーマン、ヤーン）。これらの、またそれ以外のコネクションを通じて、組織チームの大抵のメンバーはペギーダ設立に先立ち、互いに知人関係にあった。

そして2014年12月19日登録団体ペギーダの設立に至り、それまでの暫定的な活動も設立経緯の歴史に組み入れられることになった。ルッツ・バッハマンが団体の代表となり、副代表はルネ・ヤーン、そしてカトリン・エルテルが財務を担当している。なお登録団体ペギーダは、月曜ごとのデモを組織するという課題をすべて引き受けたわけではなく、またそれまでの組織チームのすべての構成員が新たに設立されたこの団体に束ねられたわけでもなかった。

ペギーダの活動を援助するため2015年3月5日、ペギーダ支援団体PEGIDA Förderverein e.V. が設立されている。この団体の設立は、後にタチアナ・

フェスターリングがドレスデンの市長選挙に立候補するのを準備することが理由の一つだった。この支援団体の設立メンバーにはルッツならびにヴィッキー・バッハマン、ジークフリート・デブリッツ、ステファン・パウマン、トーマス・ヒーマン、トム・バラス、タチアナ・フェスターリングの名前がみられる。そしてルッツ・バッハマンが委員長に、そして副委員長にはジークフリート・デブリッツが就任している。またステファン・パウマンが財務を担当した。登録団体ペギーダと異なりこの支援団体では、ペギーダの支持者やその活動に共感をもつ人々もまた会員資格を得ることができ、会費や寄付によってペギーダの活動を支援することができた。そのことでこの支援団体の課題は — 寄付を募ること以外に — なかなか支持者と共感をもつ人々を組織的に束ねることだった。後に、寄付収入から 3 万ユーロ以上がタチアナ・フェスターリングの選挙戦のために調達される（シェンク 2015.6.3）。その際どのような団体から寄付がなされたのかについては、わかっていない。

分裂

2015 年 1 月 28 日、将来に向けての政治路線を巡る内部抗争は、ドレスデンの組織チームの分裂によって頂点を極めた。その時以来、穏健で保守派市民というイメージを目指す活動の推進力は背景へと後退する。ペギーダの世話人が分裂に至った周知の原因は、ルッツ・バッハマンが公開したテキストと写真にあった。彼はすぐに代表を辞任するが、しかし背後で組織を操ろうとした。カトリン・エルテルとルネ・ヤーンが後に回顧しつつ語るところによれば、運動がその後向かうべき進路についての意見の対立が〔分裂に〕大きく関わっていたようである。この争いが一般に知られるのは、ペギーダ組織チームの個々のメンバーが政治家に接触しはじめ、メディアの可能性を探り始める時期と重なっている。

ペギーダ内部に起こった軋轢は各メンバーに深刻な影響をもたらした。12 名のメンバーのうち 6 名はドレスデンの組織チームを離れた。フランク・

インゴ・フリーデマンは活動を止めてしまい、もはやいかなる他のグループにも参加しなかった。脱会した残りの 5 名、ルネ・ヤーンとカトリン・エルテルそしてベルント・フェルカー・リンケ、トーマス・タラッカーとアヒム・エクスナーは、数日後に「ヨーロッパのための直接的民主主義 Direkte Demokratie für Europa (DDfE)」という名称の独自の運動グループを設立する。しかし、僅かな支援者たちと共に決して精力的とはいえないデモを二度行ったあと、数週間後に DDfE は崩壊する。また登録団体ペギーダにとっても組織チームの分解は同じく深刻な結果をもたらす。先ずエルテルとヤーンが団体の指導部から退任することが規約に即して行われた。団体からの離脱は団体の規約 8 条によれば、そのつど業務年度末に有効と認められ、12 条によれば同時に役員幹部職の辞任をも意味した。団体の記録に、新たに行われた〔はずの〕団体役員選挙の情報が記載されていないことからみて、登録団体ペギーダは組織チームの分裂とともに活動を中止したようだ。このような事情のもとで 2015 年 3 月 5 日に設立されたペギーダ支援団体には、ドレスデン市長の選挙に出馬するタチアナ・フェスターリングを後援すること以外にも、別の動機があったと思われる。

「ヨーロッパのための直接的民主主義 DDfE」の崩壊した後、脱落した人々はそれぞれ異なる道を歩みだす。トーマス・タラッカーとベルント・フェルカー・リンケは活動を止めた。アヒム・エクスナーは新たな抵抗運動である「東西の抵抗 Widerstand Ost West」内で積極的に活動している。ルネ・ヤーンとカトリン・エルテルは 2015 年 3 月 10 日、DDfE との協力関係を一方的に解消した。この二人はその後、フェイスブックによって組織され、「平和のハト 193 (193 Friedenstaube)」という名称のもとで戦争、難民の流入、経済的利害などの相互連関について取り組む広範な運動に積極的に参与する。このグループは 2015 年 5 月 1 日、「平和、自由、誠実」という政治集会をドレスデンにあるフラウエン教会前のノイマルクト広場で一度だけ行った。この政治集会に先立ってカトリン・エルテルはビデオ

メッセージを用いて人々の注意を喚起し、自分がペギーダの活動に参加したことをすべてのイスラム教徒に対して謝罪した。

指導部が分裂して僅か二週間後にペギーダは再びデモを行うが、しかし参加者の数は落ち込んだ。そして2015年2月9日には約2,000人ほどしかデモに集まらなかった。様々な方法によって世話人たちは政治的求心力をもう一度獲得しようと、またメディアの関心を再度自らに引きつけようと苦心している。そしてオランダの右翼系大衆扇動政治家ゲルト・ヴィルダースを2015年4月13日に招待し、また2015年6月7日のドレスデン市長選挙に独自の候補としてタチアナ・フェスターリングを擁立した。ゲルト・ヴィルダースの講演には約1万人が参加したが、世話人はより多くの参加者を見込んでいた。それ以降、月曜毎のデモ参加者は1,000から3,000人ほどに止まっている。2015年7月ペギーダは新たな政治的路線を発表する。ルッツ・バッハマンによれば、このときペギーダは市町村ならびに州の議会に自分たちの議席を獲得することを目論んでいた（アレクセ2015.6.16）。

解説

以上がフォアレンダー氏らの著書『ペギーダ』からみた、このグループの誕生ならびに活動、そして分裂に至る短い歴史の素描である。12名の創設メンバーについていえば、そのうちの3名は既に「ドイツのための選択肢AfD」、「キリスト教民主同盟CDU」、「自由民主党FDP」といった政治組織のもとで活動していたが、それ以外のメンバーは、ごく普通の市民だったようである。ペギーダの発起人であり組織の代表となったルッツ・バッハマンは、情報発信の道具としてソーシャル・メディアのもつ高い潜在的影響力について、当初からよく理解しており、これを有効に用いることで短期間に大きなデモを組織することに成功したといえるだろう。またこのグループが、ドイツ政府の難民受け入れ政策に対するひとつのアンチテーゼとして生まれたもので

あることが、この記事から読み取れる。政府の進める政策の下、国民の多くが難民支援のために積極的に活動しているような外観をもつドイツでも、多数の人々は難民の受け入れについて決して快く思っておらず、これに反対していたわけだ。そしてメルケル政権の難民政策に反対する多数の人々が、自らの立場や信条を直接的な行動で示すための受け皿として「ペギーダ」を支持し、そのデモに参加することになったといえるのではないか。

また2013年に結成された右翼的な政党「ドイツのための選択肢AfD」が、2017年の選挙で連邦議会に議席を得たことから、政府の難民政策に対する多数の国民の不满を読み取ることができる。ペギーダの活動を支援する「ペギーダ支援団体PEGIDA Fördervereine.V.」が2015年のドレスデン市長選挙に際して擁立したタチアナ・フェスターリングは、それ以前にはAfDの党員だった（『ペギーダ』p.33を参照されたい）。この政党AfDはペギーダの活動に対して、その最初期から強い関心をもっていたようだ。ドレスデン市議会のAfD会派は、2014年11月20日の新聞報道で、ペギーダのデモに対して、「暴力的ではなく、穏健にそして偏見に捕らわれることなく遂行された」と評価している（『ペギーダ』p.39を参照）。ただし、AfD内部にはペギーダに共感するグループだけでなく、これに反感をもつリベラルな保守勢力があり、両者がさらに接近し、一つになるということにはなかった。

ごく普通の市民の活動から生まれた「ペギーダ」が、今後どのようにその活動を進めていくのか、さらに考察を続けたい。